# 980

しいものばかりであった。

死物狂いになって其の怪物をはち切れと叩きつけた。そして今一度其の美しい人魚の顔を見たい、其の白い肌を抱いてみたいと思った時、ハッ！

と妖しい怪物が何所からとなく現れて、太き鉄のやうな手で、引摑んで水の底へ叩き込んで了った。

紀州丸の沈没！

無念や、乗客船員百七十二人行方不明、死体漂着十二名！

ちはら生の談から、其の貼出しを新聞

99

どうしても其所を離る事の出来ないやうに宿命された雑木は、

社の前で見たのは其時の立時境であつた。

餓ゑる其時はカラリと雨が霽れて、唯狂暴な疾風が想ひしたやうに二分三分の間を置き乍ら、権現山の立木を根こそぎ吹いて吹き飛ばさうと、これでもかこれでもかと言はぬばかりに蹴とばし擲とばしてみた。峯の松、杉は、ビユーツ、ビユーツ！と妙な呻吟声を立てて、頑張り、雑木は押倒しへし倒されも、がつしりと巌に縋みついた、撓たア、撓たア、と喚き乍らに見えた。

そを掩りながら

100



凄ろしい天気だ！と口ばやに叫いた旧弟の頭に
は、大い木片に取りつき縋りついたまま
私狂ふ浪間に捲いて捲込まれて行く脆弱い
小山の身体が四辺と没んで来た。「先生！
と云って自分の足に縋りついて来るにも

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

宿命 指第（二）

運命

65-
1 5 0
9 6 0
6 9 0

四十五枚

通計 七百十一枚

（用紙 二〇〇字詰 東京 下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「音無君、最う御寝みですか。」

「起きてますよ。何誰？」

「田辺です、一寸開けて呉れ給へ。」

「あ、田辺さんか。」と、ランプを片手に玄関へ来て掛鍵を外した音無は、「さア何卒、少し早過ぎるとは思つたが、祈待兼が厭んで皆な帰つたので、ふと考へつゝ、先ま〻立つて案内した。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

ゐます。

まだ九時頃だらう。と思ひます。

と脱棄てゐた書齋へ通つて、四角な卓を央に音聲と相對になつた。

四圍は、今晩ん限つたわけでも無いが、急に相談したい事があつて、と思ふ更まつてゐた。

音聲は何だか不安かさうやうな氣もしたが、故と添寢ますして、斯う斯う師相談ですか。と。

四圍は、僕も最う医者を廢さうと思つて



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

る。」と兎は泣い泣んで謝子で、の夫れから
五六年此の土地を離れよう。」と思ってる。」
「迄者を廃す？」と音無は寝耳に水の意外
の相談に思はず眠を睜って「夫れは全体怎う
いう理由で？」
「怎ういう理由といふほどの理由は無い。
唯、迄者が嫌になった。迄者とゐるのが厭
命を感じなくなった、とゐふだけ。」
「餘り簡單過ぎて最う少し聞かないと解り
ませんが、何ういう理由があるにしろ、今更





国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

医者を廃さなくても宣さうなもんですナ。

□君は牧師ん使命を感じなくなつても、信ぜんでも牧師ん使命を感じなくなつても、信ぜんでも者から頼まれゝば説教もするし祈祷もするが

い？

□

□そんな例を持出されると返事に困ります

が……

□さうならう？　誰だつて戦務に使命を感じなくつて、唯飯を食ふ為ばかりになつたら、迚も辛抱してゐられないと思つてるものもある。

唯飯を食ふのを一大事と思つてるものもある。



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　ガラス使用

か、少くも我々は其様な不愉快な無意味な
生活に甘んずる事は出来ない。君は千エー木
つの亡骸を護んなら、僕の心事はアレだ
。僕の目下の境界は丁度あのアンドレエ・イ
エつ井ミツ千だ……」と田原は二人の卓
上に燈杖突いて、「僕とアンドレエ、イエフ
井ミツ千とは経歴が殆ど同じだ。僕も最
初は兄貴の薦めで実教を研究して牧師にな
うとしたもんだ。所が家代々医者をやって来
たもんだから、矢張り自信も何も無しにイ





国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

医者になつたものい、矢張り僕は医者が天職で無いと見え、今まで随分本業以外に種々の計画を立て、慌しく既したり、夢おん見ないがしろ馬鹿げた程空想を逞ましくしてみたもんだ。所が其の中には変な人達が居て、僕等が最初目に憧憬れてゐる甚の幕末を利用して、一ユペックお呉れ、十コペック貸せと云つて来るんだ。あの猫た人のモセイカのやうな男が僕を先生々々と崇めてゐる事だをして、僕から何度も代を絞つたものだから、僕は主義とか理想



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

真ん理想の
為に戦はうとする人間と、其の卑しい根性の男とを見分ける事が出来なかつたのだ。

だとかに夢中になつてゐて、其の卑しい人達の心事を見抜く事が出来なかつたその例を挙げても見よう。或男が考へ償を先生々々言つて、同窓やうに見せかけ、実は校長が何んな不品行をしたとか、やれ、何所の学校の学務係が栄転したとか、やれ政治がどうだとか、町長が斯うだとか、種々な材料を揃へ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

呪つてみる社會に、ありさうな、又たより得べきやうな事を話されると、夫れが皆な事実のやうに考へられて、一も二も無く「さうだらう、現代には其様な事が有り勝だ」と言つて、ハイ夫れを信じてしまふんだね。そして演説會を開いたり新聞雑誌へ投書したりして大騒ぎをしたものさ。けれども後から考へると、其様な材料を捜き迄んで来た男が迚はしくなる、いよ〳〵調べて見ると、甚奴は僕ん演説會を開かして甚の手當の上前を撥ねて一杯



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の飲みたい者に、有りもしない事を捏造して僕を利用したんだという事が解つたり、学校の会社の体面に於ける醜聞があるとか種々な話を持込んで来て、そして木からくりの後援者になれなかつたり、其の手に乗らうとすると、甚だ自分が牢獄に入つて居る間に、甚だ自分が牢獄に入つて居る間に、一寸御愛嬌をして宣と加減に試験を済ませようと企画であつたりした。僕の居には生命を賭けても盡さうと云つて呉れた男、それは

理想の現実に沢々としてゐる僕の心を咬るんだね。僕は出手に今まで幾多の事をせられたか知れない。本当に僕を理解してゐるやうに見えた男、





国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

の家へ出入して僕を傷ましてゐた男であつたが、

しかし其男だつて遂う本音を吐いて、僕に

七石四の無心を吹掛けた。夫れは馴染の女郎

を受出さう為であつた。斯んなやうな事が僕

には数限りなく経験さ れたので、僕も先生先

生言はれる事が倩々嫌になつた。それとも僕

の眼の覚めなかつた頃は皆な夫れが主義に忠

実な熱心な男だと思つて居たものサ。所が偶

そした事から、近頃僕は甚の連中が皆な一ユ

ニック号ル！

と手を突出す痩た人のモセイ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

だから、君、僕は既に、玉石共に捨てようと思ふんだ。それは僕の本意ではなかった……

カなと知ったりなど。

旦那は吻と太息を吐いて腕を拱いて居たが又た静かに口を開いた。

「君！　千八百七十六年の三月三十日に、ペテルブルクのカザン寺の前で、男三十一人と女三十四人のアナキイストが赤旗を翻つて大騒ぎをした事を知つて居るだらう。あの赤旗事件から露国の政府は実に残酷な程厳重な





国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

けた独逸軍人になつて有名な百九十三人事件が起つたのだらう。僕はあの当時の露国で虐められた青年達を本当に可哀想だと思ふ。如何に主義に忠実な青年達でも不逞極まる行為であらゆる自由を束縛されて監視されては堪つたものや無からう。とキツパリ言葉を断つて、四倍の宅へも、ノマノフ家の迫害から逃げた連中のやうな人違ひ……ライフル銃を肩ゆて放火犯人を捕縛して行く警官を見ては、直ぐ今に自分もあの放火犯人のやうに縛られて暗い所へ叩



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

き込まれるのでは無からうかと想像するやうな、追跡妄想狂のイヴァン・ドミトリッチの様な男が何人も何人も逃げ込んで来た。僕は出ようと連中を出ようとした。丁度あの院長アンドレエ・イエフヒミッチが立ち寄って、イヴァン・ドミトリッチに向ひ合つて其の話を聞いて居るうちに、と云ふ様な哲学に感心してゐたやうに、僕も其の連中と同じ哲学を信ずるやうになつた。そして僕は自分を納得と同主義だと思ひ、納得



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

僕と同じ思想だと思つて居たのだが、……僕は飽迄も自分の説と独学の説との相違点を発見し出した。第一僕は絶対的の唯物論者となり将又、僕はどうしても汎神論者である。唯物論に対する唯霊論者である。それから僕は矢張り独学と一緒にしたい。と言つて自他の区別なく無産苦学に自分のものと他人のものとを一つにする事をせられては困る。物は飽迄に進化の行程があるんだから、甚の現状から現状の要求を無視して一足飛に

(東京下山田製)

界へ入らうとするのは無理かと思ふ。所が、僕の所へ逃げ込んで来た連中は餘りに過激な思想を抱き過ぎて居た。殊に芽は思想実行出来ると思つて居る。かかう戀愛向由論を唱ふると直ぐ妻帯花柳に戀をしたがる。家庭破壊論を僕が書くと、直ぐ殊芽は僕の家庭では何んな事をしたつて宜いのかとしやうな迷信をするんか。僕が家庭破壊を主張するのは現在の家庭因襲れた悪家庭を破壊して新しい美しい家庭を建設せよとい



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

宮



る進化の法則に準つた議論なんだ。汚が夫々と得解して彼等は皆を裏切つて了つた。彼等は何と言ふ？ 已は利己主義を唱へながら他人の窓を唱へながら他人の窓を妨げる、宿泊所を壊滅を書き立て妻君を夢したり子供を大事にする。平等主義を唱へ乍ら、我々同志が石炭の換刑に行く時、甚の罰金四円を出してやらないで、妻君の妹にオレンジを買つてやつたまるしと言つて先ア斯んな調子で遂には足を挙げて僕を蹴付



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

るんだえ。で、僕は猶太人のモセイカのやう
な〻食把性の男から逃れて、又たイリアンの
やうな男の哲学に囚はれてゐるのだが、其
の男に僕は又た一方ならぬ苦痛を背負はさ
んだ。僕の哲学なり思想なりは、イリアこの
哲学や思想と一致点はある。しかし全然同一
ぢや無い。今は彼等と僕は全く反対の位置に
立つて居るのみも知れない。この音無君、
もこか運命だ。僕は今この学室にある何と
ない市長のやうな男に、高号室へ閉ぢ込め
られると一緒に、



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

らん事ばかりか、兵隊上がりのニキタのやうな
あら
荒くれ男に、床の上に打のめされて、血反吐
を吐いて往生せねばならぬ統合を見るかも知
れない。旧家は憮然として音無の茶を一口づつと飲んで、四さう
いはのイヴアンは旨い事を言つた。ダイオ
ゲネスは柿の中で日なたぼつこをし乍ら、檜
ヤオリーヴを食つて太平楽を並べて居た。し
かし彼の男を露西亜へ伴れて来て見ろ、直ぐ
に俺郎を引いて凍えて死んでまふからうまいて



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

。梗高にさうだ。露西亜の革命の本場で
ここ、かホて長老のやうな男も出、ハんが
イナのやうな女をなも出たんだが、我々日本人が
甚様な人の伝記を読んで、夫れは外イオがネく
似をしよーと思子のは、面ぐ甚様な人の真
を寒い北の國へ伴れてまて柿の中に入れて跡
修に戦がして置くのと同じ事さ。⇒王様、あ
なたは私の日向ボッコの郭慶になるから、甚
市へ連いて下さい》なんて言ふまでも無く、
疫うの昔ん凍えて死んで居るならうよ。我々

（株）ニッピ（静岡県下山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

120.

國情の違ふ日本人が、露西亜人や獨逸人の意
我を立つて夫れは駄目だ。革命も幕命も
曾行ふ所
皆同じ事だ。そんな小説を讀んでも、
クロポトキンの著書一冊讀んでも直ぐ凍えて
死んぢまはねばならない。運命に陥ると僕な
んかは彼の人達と袂を分つ。
彼の人達を食客に置いて
じり運命が身の上に襲かゝつて来さうに思は
れる。今の境合僕は、
の根柢が違ふといふ事を、どれだけ強く主



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

張こた所で夫々は駄目だ。アこれレエ・イエフ半ミリチが、一俺の思想はイデアこ・トミトリッチと会社同一ではない〉と叫んだ所で市長は夫々を取上げないで無理に二号室へ閉じ込めてしまうたやうに、僕も夫々と同し運命に陥るかも知れない。先ア然しては運命サ。僕は今までの事と考へると、皆な思ひも掛けない意外の結果になつてゐるか、偖夫れは人間の力で何ともする事の出来ない事だから仕様が無い。僕の一件、成程あの森迫



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

状は陣君が奪還して忌まわしい鋳込んだ前科の印象というものは、どうしたって残ってみる。僕も最初の稽古は、あの脚迫を書かれた男を怨んだ、軽率な男だと憎みましたが、しかし後になって考へた。実際あの芳子の時、僕達は劇場で大演技をやらうと決心した場の僕達の頭では、あの津本とやうな男を心から憎かったのでは、口にも言はず筆にも書かなかったが、暗の底では彼の脚迫状に書いてあった以上の事を考へてみたかも知れな



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

い。僕は夫れが為めた、何んな迫害が来ても夫れを甘んじて受けるが考えだと思ふ。夫れから彼の金魚の大事だ。よし彼の大事が、失ふ又は誰かト覚の薬局から薬品を盗み出して行つて、焼こしめらん事を火にしろ放火んしろ、又は強盗にしろ、夫れを僕が会社へ知らぬ顔をして逃げようとするのは悪い。あの火事の起つた時、我々の頭に、自分の家が焼ける時のやうな悲しい感じが無かつたやないか。僕はあの時、裏二階の物置から見て居た

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

が、下の路次を走る人がひどうせ私なんな事になるからうと思つたよ。心と云ひつゝ、走つた男の声を明瞭聞いた。甚時僕の心でもの然うなり調子を合した。夫れは山と甚の間の中の者に違つたのだ。すると放火犯人と同じ疚を負はねばならないサ。苦痛を十字架に懸けたポーオ、ピロトも、夫れを超越した平衣を纏ひた。夫れは何ら示唆無君！山と旧友は潤んだ声で、山僕はあの小山伯父様の最後を不便に思ふ。あの

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

126

正直な無邪気（イノーセント）な男――神様のやうな男を泊の中へ埋めて殺したのは誰の責任だと君は思ふ。夫れは全く泊の外（ほか）を帯かねばならない。僕は小山の死に対して自分の責任（せきにん）を感じ（かん）ない。僕は小山の死に対して自分の責任を感じない。僕は小山の死に対して自分の責任を感じない。僕は小山の死に対して自分の責任を感じ

見た通はされても致方が無いと思ふ。夫れは全く手紙の一件から、火事の車から、夫から君は私こないだらうか、僕の飜譯した法律と権威――あの秘密出版物を喝破君は山の手を通して宇北へ逃亡命令配つてあります。正直な山は何も私うたに驚ろいさうを未だ鏡台つたら、いのか。そんな材料が重なり〳〵警官の眼の前に檜はつて来る時、其の警官が僕に対して危険、悪漢、あらゆる悪名を以て僕を縛りに来ても、天れは結果の為すべき事を為おた

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

なしたので、決して憤むべきでない。唯さう
いふ迫害する者と迫害せられる者とが此の世
の中で一所に落合はねばならないとしも甚遠
い命を必しも悪因縁だけだ。しかし夫れは、と
うして逃れのがこの無い事からう……
段々と田舎の話に引込まれて行つた音無は
件の唯を飽みつゝ、
田原意見は纏りました。徹底した宿命説で
すが、どうしても正右を廃さねばならないと
仰しやるには、もつと深い理由がございませ

（甚の至幸ん幸ての）



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

うえ、學に使命を感じないを仰しやるなけで
無くッて……ーー
ロ恐ろしくなって導師を
ったのサ。アンドレエ・イエフヰミッチは延
った。三十人の患者が三十五人と殖り四十人
となり、日一日、年一年毎に患者の數は殖え
る。が、此町の死亡率も病人も空とも減りは
しない。すれば、医者の尊な癒して床よのか
い、殺してみるのか……ーー此
ら、ロ病人が医者の所へ来るのは病氣を癒し



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

て貰(もら)いたいからだが、此(この)薬(くすり)なら此(この)病気(びょうき)に
仲々(なかなか)効(き)くという事(こと)ものが一服(いっぷく)でもあるか。大抵(たいてい)
効(き)くならう？　位(くらい)な薬(くすり)を飲(の)むもので、夫(それ)で癒(なほ)
るのは、夫(それ)りや丁度(ちょうど)薬(くすり)で癒(なほ)るのでは無(な)くって病(びょう)
気(き)が癒(なほ)るのだ。自(おのづか)ら癒(なほ)るのサ。カ様(さうゆう)に病(びょう)
でも癒(なほ)る病人(びょうにん)まで、舌(した)を出(だ)したり、脈(みゃく)を握(にぎ)
って見(み)たり、胸(むね)を叩(たた)いたり、眼(め)を剝(む)
人間(にんげん)の身体(からだ)を数珠(おもちゃ)玉(だま)にした上(うへ)に聴診器(ちょうしんき)
で聴(きゝ)つけて高い薬価(やっか)や診察料(しんさつりょう)を捲(まく)はせるな
んて実(ほんた)に地獄行(じごくゆ)きす沙汰(さた)だよ。アこゝレエ

イエつ丰ミいヤは、医者
の丸薬やれ薬で人る
の苦痛が癒るも人なら、
招ぎも宝教も不伊雷
だとうつたか、夫れ程の高慮から見ありても
、新薬が出来れば出来る程病人の殖えて行く
事実を知つたら医は仁術なり
理かやり無いっ雛納の模範病院も
の籔医者も五十歩百歩さ。
旧弊は之れ昂奮して
くなつて来たら帝かう能く
程赵列な雄辯はマ欠聴い


国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

音無は思はず聞惚れて感ん嘆へた。

「斯ういふ事を云ふから僕は厭がられるのだ」と田原は調子を一転して叫んだ。

くるしうない、早く近う寄れ。

そして云ふ室へおち辷りましたさう。そして此の上地を離れて何所かへ行つてしまはうと思ふ。

「能く解りました、と音無には二つ三つ點頭いてのお説はマダ十分会點あない点もありますが、決心は能く解りました。僕達が生中な理屈を云つても思留まる豊市で無いから何ん

早稲田大学図書館

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

を申上げませんが、奥様は御承知でございま
せうナ。」
「御承知も不承知も無い、断行するとえつた
ら断行する。」
「夫れは乱暴だ！」
「乱暴は認める。だが、思ひ立つたら直ぐ
吐嗟に実行するが僕の気象だ。そこで実は君
に頼みに来たのだ。僕は時機を見計つて兎に
角一旦新嘉坡辺へ行かうと思ふ。」
「時機？　夫れは何時頃でせう？」



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「夫れは盗人の夜まるく成りし如しサ。其の時機は
いつまるか解らない。今夜か明日か、又た来年か
夫れは明言出来ないが、……」
「では場合によっては明日にでも？」
「さうだ、明日にでも実行する！」
「夫れは余り早急過ぎる！」
「実は風く君には早急ならうが、此事を君に話すまでに
は散々熟考に熟考を重ねたのだ。決して一時
の気紛れや衝動から逸つたのでは無い。確かつ



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

て流行る迄右と一て恵者ん學改さん、あると
一緒ん楽しく暮したいと思はない所迄は無い
。放埒な空想論はしても現底は現底、人情は
人情。可哀しい女房子を振捨て、天涯萬里新
涙泊つて悲歌慷慨する位なら何も無い
し、釋迦や苦行や昔の聖者達のやうに、人間
の大いなる悲みを抱いて世を遁れるわけにも
無い。大水には說明出来ない或る威力一宿
命とうはうか、何とこいはうか、或る大きな力
が僕を引摺つて行くので、今までの僕の運遇



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

136

した総ての事件が、皆な僕を甚だ、苦方へと追いやるんだ。それは抵抗する事も権を失く車も出来ないんだ。僕なんて未練は十分にある、妻や周囲の事情に絆を牽かれでも無いが、依然一時思い止まって見た所で、断末魔にカニフル注射や酸素吸入をするやうなもんで、此の宿命をどうする事も出来ないし、又能く解りました。と音無く点頭いて、引き下がって行くものを、何も



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

車は出ないから何とも申上がませんが、新嘉坡（シンガポール）という
のは何か特（とく）に遠更（とおさら）浮萍の風に吹かれて漂（ただよ）やうに出
ける訳でもあるんですか。」
「遠更浮萍の風に吹かれて漂やうに出ける訳でもないが、夫（それ）
が嘸はまつと遠走（とおばし）りするか、夫（それ）も決まつて
居ないから……」孟買（ボンベイ）には次回（こんど）も三年程居（い）た
車があつたのかから……」
「それで何時（いつ）帰られます？」
「さア、」と旧（これ）学は歎息（しはら）く沈吟（ちんぎん）して後（のち）大（おお）い嘆息（ためいき）
を吐（つ）いて「三年で帰るか、五年で帰るか、或（あ）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

138

は永遠に帰らないか何とも解らんが、何だか
寂うお名残で、帰ってまる時は骨壺に入って
居るやうな気もする。それで実は後々心残り
の無いやうに、今晩君に後事を頼みたき
だ。
詰りに臨終らしいので音無は不思議に思い
なから田舎を見ると、其の眼には一杯の涙が
溜って居た。田舎は自分と自分を励ますやう
に膝と膝を敲いて、
口断乎決心はしたものゝ、唯何となく気に懸


(神楽坂下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

137

るのは、依に男子關を跨ぐれば七人の敵ありとしるが、僕の周圍にも無數の敵が姫教僕を遠巻にしてゐて、何時なん時其如等が死蔦つてゐの咽喉を締めるかも解らんやうな事がする。……イヤ眞實僕には甚様な豫感がある。折々なると古屋宅のイカアと・ドミートリッチ丑としてゐる。だが、何だか奸んな事がこ揃らんから……ヒ音無は急に悲しくなつて黙つて俯向いてゐた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

日音吾君、あの新聞も今では一枚々々に立ち行くが、石塚君一人では難かしいから僅の在ない給は君の助勢を頼む。四月になると丁度、須美子さんと一緒に、京子へ嫁入の手続きを済ますまでナオこさんと上京した後の留守居の女、最後に僅の一家の取締をする事になるんだが、何しろ年が若いから万事につけて君の面倒を頼む。夫れから堅尾君も独ア身やつて家庭を作つたのだから、万事に妄想を起さぬ様にして呉れ給へ。

サレ愛別だが、先ア安心だが、最後に僅の一家の取締をする事になるんだが、何しろ年が若いから万事につけて君の面倒を頼む。夫れから堅尾君も独ア身やつて家庭を作つたのだから、万事に妄想を起さぬ様にして呉れ給へ。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

とろかは無いが、信が居なくなつたら淋しくもあらう、悪癖も出よう。勿論信仰の無い者に宗教を強いても無効かが、何卒自発的に信仰の出るやうに導いて貰ひたい。夫れから兎角病気は有難におびやかされて声を途切らした。母親は無くとも子は育つといふかゝ親が有りながら捨てられる子は不便だ。母親無くなつたら嘸父を怨むならうが、祈つて呉れ、短命の父を持つたのが因果と諦めて貰ふ外は無い。まだ言葉と母義でなほも解らん



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

が、僕も今迄ら猶等が路頭に迷みやうな事をしてはない。どうか斯うか、やつて行けるだけの貯もしてある。君も知つての通り僕には金持の親類が何人もある。僕の掛には百万長者もある。足袋かつて何十萬の財産家だ。しく、僕の姉様を養女に貰ひ、樽井様も親類中へ披露までもした程だから、しかし僕は飽迄も親類の金持からと云つて、夫れを當にさせる事は望まない。僕が何とか一つ踏ん張つて居る時は、親類中は

即ち互いに抱き合って決心してみる。夫や子や一番近の人間達のやうに、因襲に囚はれて先祖の位牌を有難がるやうな連中ならい無闇矢鱈に殺しも知らず、僕の犯顔は皆な一風も二風も変つてゐて、そんな因襲から解放されてゐる。だから僕が僕の勝手で遠方へ行こうが死なうが殺さうが、同志と共に外国へ行こうが、僕の家内を売ろうが、僕の家内を売るやうな連中夫れは一人も居ないだらう。〝然りや〟と言ふ声が聴こえる。〝僕は夫れが正直なと思ふ。何も僕は僕自身



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

の運命に服従するんで、
従すべき運命が別にある。夫を混淆にして
やア不可い。僕は狷介を
居る。だから僕が居なくなつた後の事を
達れ、どうかうして貰はうとは思はない。だ
から狷介中が何んなに冷淡であつても怨んで
夫を怨まないやうにあれ言聞けて呉れ給
へ。左様をしない者が再縁に行く事が間違つてゐる
と、橋尾の友木とは、
ちよいと面白い気

(二〇)(藤楽荘下山田製)

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

1485

かから何とか世話みする方らう、しかし僕は
夫れさへ深い頼みは掛けない。なアに妾の
体の事は何とかなるやうになるサ。頼母子を
持つ親類を悟にするのは砂漠の中にある砂
塊を外から纏めるやうなものサ。あるにはあ
るんだが羊ら纏めたツて甘くも分とも無い。
一にも一寸甘い！　と思つたら夫れは五々
分の一の落こぼれサ。」と言つて田原は八ハ、
、、と力の無い笑ひ声をした。
吾妻は腕拱きつゝ黙然と聞いてゐたが、腕



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

寄別13-60



の底からぎりぎり鉈(なた)を揮(ふる)みおろして、みた溜(たま)り水が田(た)の高(たか)みから低(ひく)みへと、一線(いっせん)に堰(せき)を切(き)って流(なが)れ出(だ)した。

ポタ〳〵と落ちた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

147

宿命 指第(三)

改悔文

二十枚

通計七百三十一枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

# 改悔文

甚の望朝音無は朝飯を濟すと直ぐ田原を訪問したが、最う玄関には五六人の患者が詰かけて、田原はたしさうに診察室から藥局へ出たり入つたりして居た。

先ア家に居れば宜かつたと心の中で點頭きながら内玄関の所へ行つて見ると、甚所で哲子と丈太郎とが仲よく遊んで居た。

丈太郎さん、お葬式ごとをしませうね。

（昭和二〇・一・一〇 発行 山田坂下）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

「うん、誰が死ぬの？」

「パーさんが死ぬのよ。」

「うーん厭や、私まだ死にたいよう。よう姉さん！」

「かやア、お死になさい。」

「うん、あいさ死ぬよ。」

太右郎は小さな真黒なものを持って来て据えた。

この前の木箱の中へ入れようとした。音無は何気なく覗いて見ると木彫の骸骨が容れてあった。



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

「これが文ちゃんの死んだのかい。」

「うん、わいきの死んだの、これからお葬式をするから叔父さんもお手傳ってお呉れよ。」

「文太郎さん、」と哲子は可愛い、顔を傾げながら、「父さんもマ、さんもあんたもわいきも皆な一緒に死んだとしよう、ネ。」

「うん、然うしよう。一緒に死んだと、直ぐ同意した。

白いナプと文太郎は直ぐ二人は須田のこやがパ、さん、」とこれがマ

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

151

、さん、ヒと少し大きな骸骨を持ち出して来た。

「私き今ゆは死にたい事無いんかやけど、マア致方無いワ。」と捨子は小い骸骨を一つ、夫れを自分の分として箱へ容れつゝ傍と音無の顔を見上げて、「叔父さん、重いよ手伝つてお呉れエ。」

無邪気な児供の遊びが、場合が場合だけに何だか、物凄くあるやうな気がして、音無は思はず顔を曇らすと、

「ヤア、叔父さんが泣いてらア。」と父を呼ぶ



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

はニコ〳〵しながら、「笑止しいナ、私又さん、こりやア嘘の葬式ぢやのに。」

「また御葬式ごとかいナ。」と坐敷の縁側から開き戸を押しながら出て来た四尺の高の真子は音無を見つゝ、「あゝ、音無さん、さ、どうぞ」と先づ立つて坐敷へ案内した。

音無は八畳の通中へ静に座つた時、「やア、昨晩は失敬した。」と言ひながら、手術着の袖をまくり上げ乍ら四辺が入つて来た。

「失敬しました。」と音無は一寸頭を下げた

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　ガラス使用

153

が、其の瞬間に昨日までの田舎家と今日の田舎家とは全く違つた家のやうな感じがした。

何故だらう？　と思つて自分の眼を疑ふやうに キヨロ〳〵と室中を見廻し、再び縁側の音無の硝子戸を眺めて居た

ヤリ〳〵と笑ひながら言ふ。

「然うか。と音無は独言のやうに言つて、先づ壁を見、次に硝子戸の嵌つた書棚を見た。壁には此間まで掛つてゐたクロポトキンの肖像もマアクスの顔もカアペンタアの東京景



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

寄別13-60

154

も見えなかった。書棚には昨日までキラ〳〵と背文字を光らせて居たクロポトキンやマルクスやラサールなどの著書が一冊も見えなくなって居た。

「御嬢さん、いよ〳〵本当に大変なのだナ。」と思った音竜は胸がドキン！としました。しかし田舎や家は別に平常と変った顔色も見せず、新聞や雑誌の話をして居たが、急病患者が迎えに来たとの事で、アメつ子と出て行きあって俥で

音吉は夫れとなく卓子の心に探りを入れて見たが、坐とも変つた様子が見えなかつたので、先づ安心と旧望を辞して久々で太地家を訪問しようと思つて町を捜現の方へサツサと歩いて居ると、向ふから江戸暖掛の丼へ何だか一杯膨ませた若い男が、ニコ〳〵笑ひながら来るのに出逢つた。

「よう、音吉君、僕は、こゝから君の所へ行かうと思つて……」

「鳴野君か、全く労働者の姿になつて居る



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

もんだからいいようなもの
の姿（すがた）ばかりかやア奉いて、もう此節（このせつ）は心も肉（にく）も
体も悉皆労働者になつて了（しま）つたようだ。」
「おつかりうとうしや（たい）。」
鳴野（なるの）は肩（かた）を揉（ゆす）り乍（なが）ら言つて、四面先（おもてむき）の向（むこう）
こも空いたらう？」
「あゝ、行（い）かう。僕も別（べつ）に何所（どこ）へ行（い）のあ
ならぬと云ふ事は無いんだから。」
鳴野（なるの）は何（なに）を気（きせ）に入（い）らぬやうに先（さき）に立（た）つて歩（ある）
いた。そして二人は牧師館（ぼくしかん）へ行つて一緒（しょ）に食（しょく）
事をしながら四方山（よもやま）の話をしたが、鳴野（なるの）は急



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

に坐禅を迫して、

「音無君、僕は今日君に謝罪に来たんだよ」

「と言って暫く俯向いて居たが、「僕は最も断然肉労働者になる。今までのやうに社会の政治だのと言ってノラクラ遊び乍ら大言壮語して居たって詰らない。僕は寧ろ君に失敬な事を言った。僕の頭は唯物論で凝り固まりきって居たが、僕は真絡秘々と考へた。考へた結果は人間としてのもの、終りに小い事を考へつけたのだ。無限の宇宙

別

1

！　夫れは何という恐ろしい言葉だろう？
吾々は此の悠久な宇宙の間に、一体何をして
ウン十年生きる間に、唯
み居るんだろう。唯み合つたり引掻合つたり、
全で猛獣のやうに悉しい生活をして居るがや
ないか。我々は此の不動な現代を改革しよう
と言つて、やはり矢張り駄獣のやうに唯み合つ
たり蹴飛ばし合つた許で何になる？　夫れで
は駄目だ。先づ空吹を止めるんだ。付元気で

（原稿用紙二〇〇字詰）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別



大言壮語する事を廃めんだ。沈黙して沈黙して全世界が一イーン！と静まった時、厳粛な運命の問題が解決するんだ、寂滅為楽だ！僕は遂に思ったから種々な不要の書籍も焼棄てた。そして沈黙して一生懸命に働いて見る決心をした。根限り働いて働いて働き通して見ようと決心した。夫れが僕の大きな罪業の贖罪だ！も一つ言った。音無は黙って聞いて居たが、

（かごの罪業の深い）



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

160

の罪業？　君の思想でも罪とゝる事を感じる事が出来ますか。」と問うた。

「僕は今まで総ての罪悪を総て犯罪犯業の不完全から起こるものとして居た。道徳といふものは階級物を食はす事かといふフオイエルバッハの説を本気に唱ってみた。実私なんて頭から馬鹿にしてゐたが、近頃は独り思ってくなつた。僕は窃盗罪にも、殺人罪にも拘泥する大悪人なとゝ云ふ事を知つた。僕が唯一人で引受けねば僕一人で、僕一人で、……！」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別

161

ならない恐がある。甚の大きな恐を茨見(おっぺ)これ
僕には、もう今までのやうな態度(たいど)では居(み)られ
なくなつた。僕は今大きな罪悪(だいあく)を身(み)に引受(ひきう)ふ
て居(み)る、だから僕は一生(いっしょう)懸命(けんめい)に働(はたら)いて、最後(さいご)
迄(まで)残(のこ)る半生(はんせい)を償(つぐな)はうと思
ふ。」と言つて鳴野(なるの)は(暗闇(くらやみ)のなかで)丼(どんぶり)から一冊の小(ちい)さい和綴(わとじ)の
本を出して、同(おな)じ所(ところ)だよ、今僕の観(み)つてる所
は！……」
吾妻(あとを)は鳴野(なるの)が開いて自分の前に差出(さしだ)した
大所を読んでみた。



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13

102

サウニ餘ノカタヘ心ヲフラズ一心一向ニ佛
助ケタマヘトマウサン衆生(シュジャウ)ヲバタトヒ衆業(ガイゴフ)
ハ深重(シンヂウ)ナリトモカナラズ弥陀如来(ニョライ)ハスクヒ
マシマスベシ。コレスナハチ第十八ノ念佛(ネムブツ)
往生(わうじゃう)ノ誓願(せいぐわん)ノココロナリ カクノゴトク決(ケツ)
定(じゃう)シテノ上ニハ寝(ね)テモ覚(さ)メテモ命(いのち)ノアラン
カギリハ称名念佛(しょうみょうねんぶつ)スベキモノナリアナカシ
コヽロ

『さうだ、重(おも)きを負(お)へるもの我に来れと甚(くり)
抑(すと)の言つれつも其所(そこ)なし。心と言無(あるこ)は眠(ね)と開(ひら)て

別

107

考へ初めた。そして昨晩田圃の話した其の話の何所かに鳴野の姿がちらついて居るやうな思はれてならなかつた。

――依て、あの火事が失火にしろ放火にしろ、又た誰かが僧の事向から薬品を盗み出して行つて怪しからん事をしたにしろ……僧はあの山伯父様の最後を不便に思ふ。僧の正直な神様のやうな男を波の中へ埋めて殺したのは誰の責任だ……辻褄の合はない事を書き並べて十薬に香の物を添へ



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別

107

大きな犯罪丸は

遂とて居た男あらん丈の声を出して
ソノ〳〵
音無の滝の中に
断崖四方を削って
舎許の
節々が断続して
裸
くり
出される時、音無の滝の前には恐ろしい光景
かつ
がつ丼ルムとなって現はれた。
《やッつけろ！》と叫びながら闇の中を
タ〳〵と溜の方に駈けて行く怪物の姿がアリ〳〵と見えた
荒小て
能野の灘は荒れに
に海底深く沈んでうた
助けて呉れエ——と
恐ろしい響と共

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

104

別行

叫が乍ら浪間に沒きつ沈みつして居る癈せこけた小山の姿が見えた。しかもべと〳〵に濕れて肉體にぴつたりと捲付いて居る着物の縞から柵まで明瞭と見えた。

我等も明日延ばしなりつゝさアもいと大きい盃を持つて来い！

こうてへべレケになつて酔狂つて居る鳴野の姿が現はれた。

癈からパタリと歌の上に疲れたものがあつた。

見れば九寸五分だ！



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1



音無は身の毛が弥立つ様な幻覚の後に、今眼の前に響き渡る重々しい音響を聞いた。

「ベン、ベン、ベン」と改悔の文を唱へて居るのかと思ふ時、音響は甚の開がた眼を開く事が恐ろしくなつて来た。いやうに感じた。

「おやつ君、失敬するよ」と言つた鳴野の声に驚いて眼を開けて見ると、甚許りは頼もし気な生々した鳴野が跡なくやうな眼で音無を凝視めつ見詰めて居た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別1

166

宿命 後編 (四)

行方

百二十一枚

通計 八百五十二枚

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

107

行方

知れずの妻であった。音葉が二階の書斎で、ルゲネーフの日文と云う、露国の今日は……」と聞き慣れない声がした。誰かしらん？と思うながら降りて行って見ると、硝子戸の外には色の浅黒い、四角な顔の大男がハンケチで汗を拭きながら立って居た。

「何誰です？」と戸を開けながら聞くと、

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別

108

「僕は鈴森署の樽本(たるもと)です。」と言いつつ、名刺を差出した。

「さうですか、何卒(どうぞ)お入(はい)り下さい。」

「用事ですが、」

「一寸お尋ね致したいのですが、東京から来穂(きすい)とゝいふ男が見えませんでしたか。」

「来穂？　知りませんですな、そんな人は……来穂(きすい)何と言ふお名前ですか。」

「来穂初(はじめ)とゝいふ男で、甚(じん)吉(きち)とゝふ秋葉出張(しゅっぱん)を……やつて、紀州へ逃げて

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別
6



来たという事なので……。

□労働者の福音？　夫りゃア僕とは関係の無い事物やありませんか。

□だって福音というから皆、老智教の事を書いてあるんだらうと思ふ。

□違いますよ。夫れは。夫れは永生を表者の書物。

□さうかも知れません、先ア老智教とは似寄つたものさ。

言いながら櫂棹は巫覡をくろ〳〵見廻して



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別6

170

居たが、「やア失敬しました。」と言って出て行った。音吉は変な事を言う男だと思いながら書斎へ引込したが、何か夫が気になって、何時迄も帰らないので、直ぐ旧家の家へ出かけて行った。

丁度旧家が往診先から帰った所であった。

「うん、甚だ書物は二三は前に儂の所へ送って来た。別に大した書物でもないが、同盟罷工の事を書いてあるので discipline を乱すと

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別13-60



のからう。

○私の当初の予定ですか。

○なほ、私の当初にする積のもの少々

驚いのサ。

ゆさうですか、しかし名前も何にも知らな

い妻様君が、僕の所へまで居ないかつて言ふ

のは、どうした理由ですか。

○多分僕の所へ来て居なからうかと思つて、遠

廻はしに君の所へ尋ね行つたのかも知れない

お。

早稲田大学図書館

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別6

172

「さうですか、では其の妻君が来る筈なんですか。」

「まやしないならう？、僕も既う近所、あの連中と殆ど通信しないで居るし、加之先生が入つて来て、「僕は今警察へ喚ばれまして来た。」と言つた。

「警察へ？、どんな事で？」

「納本が着かないと言ふんで……」

「納本をしなかつたのかい。」と内海は疑ぐるやうに覚也の顔を見た。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別

173

「納本は毎号後が常(つね)封を書いて、仲本発送して居ます。夫れなのに、どういうものか、内務省へも検事局へも本月の廿日から廿五日まで六日分が届かないというん です。」

「不思議だネ、夫れは？君の方では間違(まちが)いなく発送したのかい。」

「ええ、間違(まちがい)無く発送しました。多分何かの行違いでせうよ。」

「六日分も未着(みちゃく)というのは不思議だネ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60　　ガラス使用

別

179

田舎は頼りに頭を傾げて居たが、何か思い
當る事でもあるやうに、
「石塚君、近頃掲載差止命令がありはしませんか
つたかい。」と問うた。
「一昨晩の二時に一つ来ました。」
「どんな記事の？」と田舎の顔は色めいて
みた。
「なアに、何でも無い事らしいのでした。中
村、根本某々の犯罪事件は醜審中に付刑囚紙
に掲載すべからずと書してあつたゞけで、

別

175

私が、どんな事件やら、何をしたのやら薩張り解らないんです。」

「えっ？　中村も根本も……」と田架は甚く驚いた様子であった。

「先生は其の事件を仏蘭西風なんぢやないかと覚也が問うた時、書生の平岩が次の室から、

「石塚さんに此の仕事を……」と言い乍ら、すぐ使いが持って参りました。」と言って茅筒に入った手紙を一通の上に描いた。

中藏二〇（縦罫紋下三田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

176

覚也ハ区裁判所カラ
夫ヲ拉シテ中カラ秀濃罰紙ヲ取出シテ、驚
キノ上ニ擯カタ。三人ガ額ヲ集メテ読ンデ見ル
ト、

検第和四号

新聞紙掲載差止命令申立一部解除通知

曩ニ掲載市長止メタル事件ニ付左ノ事項ニ限リ甚掲載市民ノ許ス

英領新嘉坡ニテ

中村、根本カメ男七名女一名共謀シ、和蘭
出版ヲナシ過激ナル行動ヲナサントシタル

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

二行アキ

コト發覺シ右八名ニ對シテハ既ニ起訴セラレ今ヤ豫審中ニシテ其内容ハ勿論公證ヲ缺キ犯罪行爲及ビ嫌疑者ノ犯意明確トナリ其次第ニ捜査及ビ起訴ヲ俟ツヘキモノナシト見込ム

右通知ス

とあつた。田中は最後の「其次第ニ捜査及ビ起訴ヲ俟ツヘキモノナシト見込ム」を引き取り二三度讀返して頷いた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別



音無は田原の家を出た足で、信者の家を二三戸訪問して帰つたが、何処か田原の事が気に懸つて堪らなかつた。

寝室へ入つたが昼の温気に汚水を離れた蚊が、ブーン、ブーンと二羽三羽襲つて来るので、どうしても眠付かれなかつた。で、洋燈に火を點けて本棚の投げ出して置いた聖書を取つて、蒲団の中へ潜り込んだまゝ右の手を枕の後の方へ廻して、八冊枕もと

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13



アくびと小い欠伸をしながら、甚所にあつた小説を一冊手探りに探つて取つて顔の上に持つて来て見ると、夫れは木下高江の四元気食也であつた。白ツぽい表紙に印刷した清朝初年版行の四元気食也といふ字を見た時、音無の頭には直ぐ中村の顔がアリ〳〵と見えた。

夫れは前の年の秋の初であつた。音無は此の元気食也をいち早く携つて田辺の家を訪問すると、入口の所に立つてゐた田辺が、



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

190

「おう、春雪君、丁度宜い所へ来た。今不
東京から来て居た中村君が、最う明日此家
を立つて新嘉坡の市へ行くので、お名残に熊
野川の模型を少し見せよう」と思つてゐる所だ
と言つて、ニコ〳〵と笑つてゐた。
「熊野川の模型？　模型つて何ですか？」
「会館を見せる事が出来ないから、一寸川
口だけを見せて、夫れで我慢して貰ふのさ」
「さうですか、お供しませう」
「行かう、薬屋の中にも居るんだし、大変

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60

ガラス使用

別

に居る親類の子も一緒に行くんだ。薬局屋と
醫者(いしや)と牧師(ぼくし)!!!　大ヤーんと通号(かうぐ)は揃(そろ)つて来(ネ)
ハ、ハ、ハ山
音無(おとなし)が中村と親(したし)く話(はな)したのは此時であつ
た。一同が舟の繋(つな)いてある所へ行つて、舟夫
の来るのを待つて居る間(ま)、中村は音無(おとなし)の手
に提(さ)げてゐる弁当(ベン)を見て、
「夫(それ)は木下君の弁当(ベン)じやせう？」と問(と)ふ
た。
「ええ、さうです、今宵つて来たばかりで

（縦二〇糎×横十三糎）

国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別行

192

……最う御覧みになりましたか。

田木下君から頼まれて来たが、実れは君、トルストイズムだよ。

中さうでせう、彼の人の書いたものですから……

田最う君、トルストイアニでもあるまいし

やないか、今頃……

中村は神か音楽を軽蔑もやうな調子で言つたのであつた。音楽は其の本の表紙を見詰めて居たが、其の時亜中村の言つた言葉が一



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

183

々記憶の湍から涙みおとして来た。そして甚時の事を狙あであつた新うであつたと繰迎し繰しなし、うつ、くと眠つて了つたのであつた。

ドンドン！ドンドン！と厳しく表戸を敲く音がしたので、吾無は吃驚して飛起きた。

「何誰ですか」と言いながら寝巻のまゝ玄関つ出て、戸を引開けて見ると、マダ暗い背廣姿の男が、つツと中へ一歩も舎つ入つて来たと思あと、昨日位くなつたばかり

（二〇、（鈴業五千山日製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別6

1877

の巡査服が三つも四つもドカ〳〵と押込んで来た。

「ヤア、昨晩大警夜更しをしたので朝寝坊を致しました……清潔法の検査ですか。」

言葉の終らないうちに、背廣服の男は一枚の名刺を音無の前に差出して、

「大審院の命令で……すぐ御帰りなさいまして。」と言った。

「大審院？　どんな用で？」

言われながら音無は其の名刺を見ると、五号

（第二〇〇号）（明治十一年十月）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別13-60



法廷での検事四村百麿とあつた。大審院とは恐らく四村検事の口から出任せに言つた言葉であつたらうが、音無の境遇と大審院とは餘りに懸隔が甚だしかつた。だから音無には其の言葉が何かの間違いでもあらうとしか感じられなかつた。殊に清潔法の検査とも言い大審院との連絡は全然取れなかつたのである。

「清潔法の検査かやア無いんですか。」と言いながら外を見ると、其所には五六人の白い洋



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6

服が立ってゐた。

「赤穂君がお宅に宿つてらつしやいません
ですか。」

探事は静かに尋ねた。音聖の心は刹那空虚
を打つ人の心を嘲笑せざるを得なかつた。

「赤穂君？　柳本さんが昨日も其の方
を尋ねて来られましたが、私には甚様なお方
の名前も知りません。」

「一寸お宅を調べさせて戴きますが……」

「さあ〳〵、どうぞ調つて下さいませ。」

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

三百六ページ

音無は何心なく斯う言つた。けれども、何うした丸ものか、後り務てが意分であつたから、暫く眼を瞑の立つて篠疏も何んも無かつた。

捨事は巡査を指揮した。一人は表に立番をして居、一人は裏口へ走つて行つた。捨事は巡査を率て先づ二階の寝室と書齋とに上つて行つた。音無は其所ら其所の雨戸を引明けて歩いて二階へ行つて見ると、巡査は皆な書棚の前に立つて各々に五冊十冊宛の書籍を



国立国会図書館　タイトル『宿命』 請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別

引出して、紺帝此帝ヒ陣取つて、甚の夏の一枚一枚を調べて居た。

この様(さま)を見た音無の心の中では冷(つめ)たい皮肉(ひにく)な笑声が聞えた。

「妻標君は、そんな老物の間(あいだ)には居ませんよ」

「ヤーイ〳〵」

音無(おとなし)は斯(か)う言つて、ニヤ〳〵笑つた。

の顔を見たが、

「若し帝通信をなすつてらつしやるかも知れませんから。」と言つて換事の部は急(すぐ)通用で

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別6

あった。

「あいさつですが、」と言って警官は家
枠(わく)の附(つ)け障子を掛けて掃除や巡査のする事を暫
く凝然(ぢっ)と見詰めて居るうち、「家宅捜査！」と心の中で叫(ふもの)があった。しかし全
体何の為に巡査の七人も来て斯んな大騒ぎをするのだらうと思ふと、夫が違(ちが)ひとなり
違(ちが)ひから来た滑稽(こっけい)では無いかと云ふやうな感じもした。

一同は書物を一通り調べた。夫から古い



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別

190

手紙を一々読み初めた。手帳類を見た。抽斗の中の蒲団から甲斐かいろりあり とあらゆるものを悉皆調べた。

四こゝは何の為に使うものですか。と一人小巡査が小い箱の中にあったカアドを拾くり乍ら言った。

四夫れは御蘭西張の複刷カードです。

四カアドや、花合せのやうなものですか。

四い、え、違います。言葉を忘れないやうに書いて置くのです。



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別6

「これは何の薬ですか。」と別の巡査が訊いた。

「夫れは薬ぢやありません、ギブスです。」

「ギブス？　どんな事に使ふのですか。」

「なアに、一寸悪戯をして見たのです。」

「悪戯を？　どんな事ん？」

「こんな物を作って見たんですが……」と音無は笑いながら、床の上にある泣きかけた天の使を指した。

斯うして、七人の巡査は室内のあらゆる場



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用

別



所から、あらゆる物を調べた。或者は白い服に埃のかいるのを気にしながら天井を覗いた。或者は床下を覗き込んだ。或者は便所の中を換べた。

最初から終まで書籍と手紙とを少死に調べて居た換事は、静ん音無の所へ立つて来て、「ホこの形式ですが、身体検査を致します から……」と言つて、両の袂を着物の上から静かに押へて見て、夫から「帯を解て見た が、何どうも失礼致しました。」と頭を一寸下



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60

ガラス使用

別6

1923

げた。

「さア引揚げよう、押収するものは無し！」

と捜索は屈託したやうに言つて靴を穿き初めたので、七人の巡査もドヤ〳〵と庭へ降立つた。

「一体何事からう？」と心の中で言ひ乍ら出て行く巡査の後姿を見て居ると、引違へに平野といふ刑事巡査が入つて来た。平野は音無と四五回話合つた事のある男で、和歌山辯で、「他人と對話する時、キマリ悪らない

（株）三〇（鈴木松子山田製）

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60　　ガラス使用

別13-60



悪さうに屓む男であつた。

「音無はん、えらう濟みまへんけろ、一寸署まで行て戴けませんやろと思いますさかイ。」

人間の善さそうな手勢は顔を紅らめながら言つた。

「宜しい、参りませう。」音無は直ぐ羽織を引掛けて、手勢と一緒に警察署へ行つた。行くと、一体何の騒ぎだイ？」と訊いて見たが手勢はただ、何かすやろ、我々のやうな



国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号　寄別13-60
ガラス使用

別
6

137

な下級な者には、さっぱり雲を摑むやうで判
りまへんさかい。」と三元つた。

警察署へ入つて見ると正服私服の巡査が二
三十人がヤ〳〵と犇しさうに右往左往して居
た。

ろ、ろ、ろ、此方へ……」と平野は音無を裏
の方の一室へ案内した。

平野が小腰を屈めて出て行くと引違つた正
服巡査が入つて来て、「あゝ暑い〳〵」と言
ひながら音無の前に腰を掛けた。

国立国会図書館　タイトル『宿命』　請求記号 寄別13-60
ガラス使用